

第2 回度左京みらいデザイン会議 摘録

1 日時

令和8年5月25日（月） 午前10時から

2 場所

左京区役所 中会議室1

3 出席者

氏名	役職等
川勝 健志 ◎	京都府立大学社会科学部 教授
江藤 慎介	左京朝カフェ企画運営チーム 代表
熊谷 聡	市民公募委員
長谷川 英文	特定非営利活動法人大文字保存会 理事長
松瀬 萌子	久多里山協会 理事
松本 恵生	京都市地域包括支援センター・在宅介護支援センター連絡協議会 副会長
山口 ケイコ	株式会社山口書店 代表取締役
和田 紘子	大原社会保険労務士法人 代表 株式会社ハッピーワークデザインラボ 代表取締役 CEO
大江 明生	区長
小谷 直子	副区長
矢野 裕史	左京区役所地域力推進室 左京の魅力づくり推進・山間地域振興課長
近西 茂	左京区役所地域力推進室 左京の魅力づくり推進係長
濱田 佳奈	左京区役所地域力推進室 地域連携促進係長
森田 健治	左京区役所地域力推進室 左京の魅力づくり推進担当係員

〔◎は座長〕

4 内容

(1) 運営方針策定に当たり、区長（区役所）としての思いを共有

- ・まちづくり運営方針の策定に当たり、お互いさまのこころを大切にしたい。
- ・様々な活動に参加するたびに担い手がいな、という話を耳にする。自身が属する地域の集まりも複数あるが、いずれも自身が最年少であり、今後は危惧するところ。
- ・そうした中で、都市部においても地域の担い手がいなという話を聞く。生活が多様化し、それぞれが属するコミュニティでどうふるまえばよいか、どう関りを持てばよいか、分かりづらくなってきていると想像する。
- ・そうした中でも、災害時をはじめ、最終的には近くに住んでいる人とどれだけコミュニケーションをとっているかが重要になってくるものと考えている。
- ・今後の地域コミュニティのあり方について、地域外の人も含めて、どのようにあるべきか、取り組んでいく指針になるのがこのまちづくり運営方針である。

(2) 次第1「左京区まちづくり運営方針」について

事務局から、資料（※主に資料4、補助的に資料3）に沿って説明し、意見交換。

ア 主な御意見

<全体>

(和田委員)

WHY（何のために）、WHAT（何を、どんな価値を）、HOW（どのような姿勢で）という点を押さえている点は良いと思う。

「区民」という言葉について、運営方針の主体が区役所と区民や左京に関わるすべての人ということであれば、「WE（私たち）」という表現もいいのでは。

(左京区役所)

運営方針が誰向けかといえば、左京区に住んでいる区民の方、左京区に働きに来ている方、学校に来ている方、もちろん左京区役所職員も含まれている。私には関係ないとならないように考えて、今の表現となっている。

<目指す姿>

(松本委員)

助ける側、助けられる側、という関係はなく、やりたいことがある人は誰でも、誰も取り残さない、という書きの方が良いのでは。

(江藤委員)

自身の感想として、左京区のイメージは自由があること。マイノリティの方も自身の抱えるハンデを卑下せず自信を持って生きている方が多い印象。「自分らしく過ごす」ことを実践できているということかもしれない、左京区のよい部分と思っている。

「人を助ける側だった人が、ときには助けられる側にもなる」という部分が、イメージしづらく、この表現で良いのかと思った。また、書くなら順番が逆でもいいかと思った。（「助けられる側だった人が、ときには人を助ける側にもなる」）

(和田委員)

「関係性の質」という考え方がある。結果だけにフォーカスすると、「できていない」ということで不和が生じ、良い結果が出づらくなるが、「今のこの状況はいいね」「これはできているね」とお互いが認め合うところから始めると、人も集まりやすく、良い結果が生まれやすい、という考え方である。現状のよい状況も認識しつつ、数年後もこの状況を維持していきたい、という未来のありたい姿を描く方法もあるかと思う。

また、現状の記載は少しふわっとしてまとまりがない印象だが、詳細版には目指す姿のより詳細な記述が項目立てて記載がある。A3版の方も他のパートも含め

て文量を工夫すればこれらが記載できるのでは。

(川勝座長)

こうしたビジョンについて、多くの場合、具体性を求めがちだが、それぞれに考えてもらう余地、余地、抽象度を残す方法も一つかと思う。具体的に書きすぎると、それに縛られてしまったり、また書かれていないことについて、納得できない人もいるかもしれない。

<皆様に大切にしてほしい思い>

(和田委員)

「意識」という言葉は意識しづらい。何を意識したらいいのかを考えると知識が必要。何をすべきか、具体的に書いた方がよい。

(川勝座長)

「大切にしてほしい思い」の内容としては、区民だけでなく、区役所の職員、あるいは左京区に関わるすべての人を対象とするものであれば、「皆様と共有したい思い」とする方が適切では。

<まちづくりの方向性>

(川勝座長)

会議に先立ち区役所と打ち合わせをする中で、4つの柱の項目について、写真等でビジュアルに訴えかける見せ方にしてはどうか、と提案した。可能なら文字数ももう少し削り、まずはイメージを共有する、そこからさらに詳しく知りたい人は別の紙面、資料等を用意しておく、というアプローチもできるかもしれない。それにより、より詳しく調べるという主体性も育まれるかもしれない。

(山口委員)

写真で訴えかける見せ方はいいと思う。写真がきっかけで、文章を読んでもくれるということもあるかもしれない。

(川勝座長)

柱4に関して、これまでから、過疎化、地域の担い手不足、アクセスの課題等、北部山間地域については長らく「支援」するべき対象として語られてきた側面がある。そうしたフォーカスが適切なのか、自身でも悩んでいるところである。見せ方、表現として、左京区には山間地域から都市部まで多様な土地柄がある、というポジティブな面でのアプローチも必要ではないかと思う。具体的には見出しとして特定の地域を前面に出すのではなく、山間地域と都市部の交流、つながり

の創出といったことがここで達成したい目的であるならば、そのような表現も一つではないか。

(松瀬委員)

交流を育むことももちろん必要だが、移住者が増えないとコミュニティの維持は難しいと地域に住む当事者として感じている。自分の意識は北部山間地域のことが書かれている箇所自然と注がれるが、このパートは抽象度の高い内容が多いので、これを読む人がそれぞれの項目について当事者意識を持って読むことができるかを懸念する。

(長谷川委員)

こうした計画や方針で看板を掲げると、押しつけになる側面もある。現実的には地域の活性化を思っただけの結果、人が集まりすぎて迷惑だと言われたこともある。

また空き家や担い手不足等の課題は山間地域だけが抱えることでもないので、エリアを特定して書くことも適切でないと考えている。

案として掲げている柱の4項目は、これまでの計画を策定する際にも書かれてきたことであり、いまだに書かれるということは、それだけ難しい課題であるということ。20年近くこういったことを検討する場に参画しているが、何項目かだけでも進められるたら、と思う。

(左京区役所)

柱4に関して、ポジティブな面での打ち出し、また特定の地域に言及した表現の是非という意見があることも理解する。一方で、絶対的に条件が不利な地域であることが現実であり、左京区役所としてそうした地域を見捨てない、支援は外せないという姿勢の打ち出しは必要と考えている。

誰しも生きていく中で必要な水や食料の源泉は山間地域であり、左京区という地は、山間地域と都市部を併せ持つ、大都市としては珍しい特性を持つ。左京区として、こうした部分の姿勢は打ち出していく必要があると考える。

(松瀬委員)

方向性に示した項目について、写真を添えてビジュアルで訴求するのはいいと思うが、写真が小さく、伝わりにくいかもしれない。抽象性が高いため、それらを表現するのであればイラストでもいいかもしれない。ロゴ、シンボルマーク化するのも一案。また、現時点で書かれている文章は区役所が書いた定義であるが、読み手の受け取り方は様々である。例えば「左京の個性」といった時、思い浮かぶことはそれぞれ違うだろう。であれば、最初から定義せず、各自に考えてもらう抽象度を残し、それぞれに言語化してもらうのも一つでは。

(長谷川委員)

左京区のシンボルマークを作った時はみんな使っていたが、1, 2年経てば使われることが減ってしまっているのが現実。

(山口委員)

ロゴマークの意見もよいアイデアと思う一方、SDGsのマークなど、説明がないと分からないものもよくある。もしそうしたものを作るのであれば、職員や素人が手掛けるのではなく、プロのデザイナーに頼む方が良い。

(川勝座長)

柱の見出しについて、語尾が動詞で終わると体言止めが混在しており、動詞に統一した方が良いのではないか。

(和田委員)

「支援」という言葉は困っている人だけが対象になっている印象を受ける。予算、リソースを一緒に使っていくというニュアンスがあれば。

(松本委員)

柱1の「重層的支援」という言葉について、子ども、高齢者、障害のある方、貧困の相談等に対し、区役所として組織の縦割りを排し関わろうという姿勢、取組かと思う。福祉に携わる人間にとってはわかるが、一般の人に伝わるか、という部分は気になった。

<令和8年度の主な取組>

(熊谷委員)

令和8年度の主な取組の記載について、ある程度予算が決まっているとのことであるが(令和7年度中に予算編成済み)、具体的に何をするのか、個別の取組の名称等も見えないので分かりづらい。予算総額は2千万弱と広報されているが、方向性でうたう柱に対して何をいくらかけてやるのかが見えない。

(川勝座長)

このパートはあくまで単年度の事業の例示と捉えている。他のパートは5年間不変のものであり、紙面をもう少し絞り、他のパートに割り当ててもいいのでは。

(江藤委員)

A3版(資料4)を見てきた中で、「子ども」というキーワードが出てきたのはここが初めてだった。方向性の記述部分には入っていないのか。同様に、「事業者」というキーワードも出てこない。近年、まちづくりに関わる事業者も

増えてきている。そういったあたりは盛り込まなくていいか。

<その他>

(松本委員)

子ども版の運営方針があってもいいのかもしれないと思った。子どもが家に持ち帰り、親と話す中で、親が子どもから教えられること、そこから親が意識し情報を取っていく、という流れもあるかもしれない。

(長谷川委員)

この会議を北部、南部で開催してはどうか。同じ発言をしても各地域の受け止め方は当然違うはずだ。こうした計画、方針を考えるとき、最近は大きな会場を用意し、地域の人に来てもらって意見を聞く、取組を紹介する、ということが多いように思うが、区役所や、自分たち区民を代表して出席している者が地域に出かけて行って直に声を聴くという、かつての姿勢に見直すべきかもしれない。区役所も、地域の住民に対してどのようなサービスができるか、という考えが出てくるかもしれない。

(左京区役所)

本日いただいた御意見を基に、座長と協議のうえ、最終版としてとりまとめ、お示しさせていただく。運営方針をどのように広げ、普及させていくかという点については、策定後、来年度の取組として検討し、次回会議（秋頃を想定）でお示しさせていただきたい。

(3) 次第2「その他」について

特になし。